

土佐一宮

境内略図



- ① 事代主神社
- ② 西御前社
- ③ 大國主神社
- ④ 本殿
- ⑤ 幣殿
- ⑥ 拝殿
- ⑦ 神庫
- ⑧ 神饌所
- ⑨ 輪抜祓所
- ⑩ WC
- ⑪ 社務所
- ⑫ 倉館
- ⑬ 鼓樓
- ⑭ 放生池
- ⑮ 蔽島神社
- ⑯ 御手洗池
- ⑰ 瀧宮
- ⑱ 神明宮
- ⑲ つぶて石
- ⑳ 手水舎
- ㉑ 表参道
- ㉒ 楼門(神光門)



鼓楼正面(国重文)



参道入口神光門(国重文)

土佐神社略記

重要文化財の建造物

本殿・幣殿・拝殿／長宗我部元親が元亀元(一五七〇)年に再建した建物(国重要文化財)

鼓楼／一棟 慶安二(一六四九年)二代藩主山内忠義の建立(国重要文化財)

楼門(神光門)／一棟 寛永八(一六三三)年、二代藩主山内忠義の建立(国重要文化財)

宝物

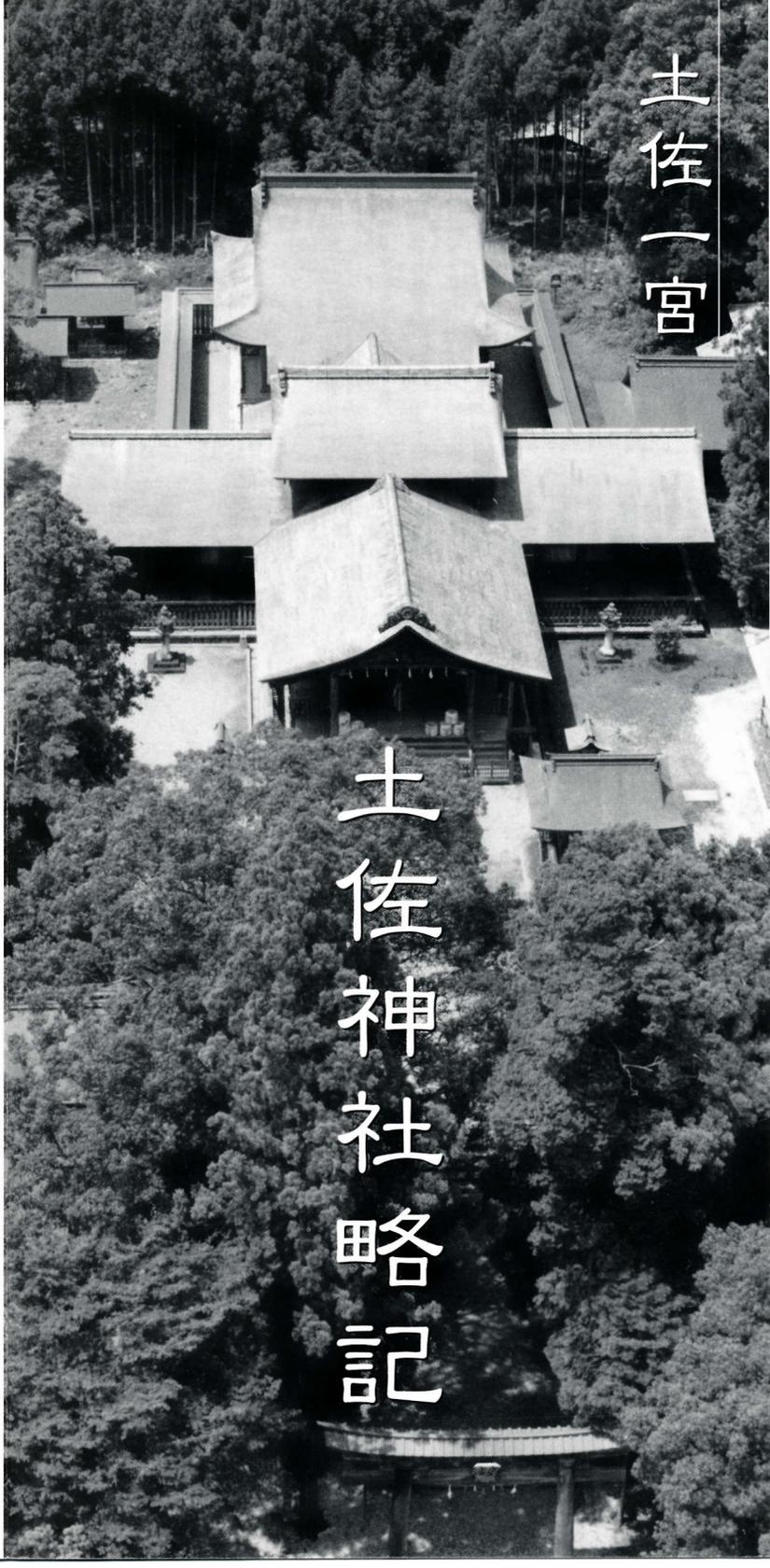
鯰尾鉾／奈良〜平安時代と推定

古鏡／古代〜江戸時代(市指定)

能面／室町〜桃山時代(市指定)

明治天皇御衣／白羽二重 一領

〈その他〉神輿、大太鼓、絵馬、書画等



主 年 中 行 事

1月1日
歳旦祭 午前10時

1月
射初祭 (いぞめさい)
両鬼門に向かい、天地清め祓いを行い、国の隆昌を祈願します。

3月11日・12日・13日
斎籠祭 (いごもりさい)
11日夕刻より13日夜明迄
参拝者の境内参入を禁じ国の安泰を祈願します。
(この間の参拝は鳥居からとなります。)

6月30日
大祓式(夏越の祓)
(おおほらいしきくなごしのはらえ) 午後4時
日々の生活において知らず知らずのうちに犯している罪・穢を祓い清めるという日本の伝統行事であり、大祓詞を奏上し人形で清め、境内に設けられた茅の輪をくぐります。

8月24日・25日
しなね祭

10月8日
秋 祭 / 午後2時

11月23日
新嘗祭 / 午後2時

12月31日
大祓式 / 午後4時

御 祈 願 御 案 内

社 頭 祭

新 春 安 全 祈 願 祭

節 分 祭

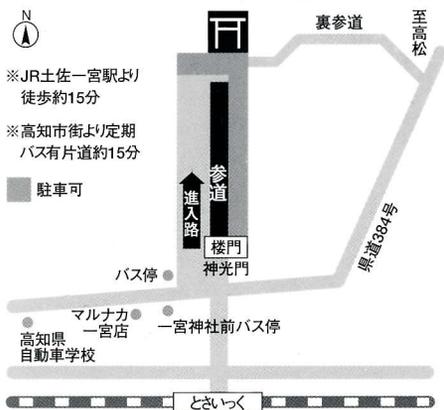
七 五 三

初 宮 詣 家内安全 商業繁栄 交通安全(車祓) その他
厄 除 け 方 除 け 学業成就 安 産 諸祈願
身 上 安 全 病 気 平 癒

出 張 祭

地鎮祭 落成祭
安全祈願祭 家祈祷
年忌祭 慰霊祭
その他
諸祈願

周 辺 見 取 図



神 土 社 佐

土佐一ノ宮 土佐神社 (しなね様)
高知市一宮しなね2丁目16-1
☎088-845-1096
☎088-845-1095
<http://www.tosajinja.i-tosa.com/>

由 緒 地



礫 (つぶて) 石

往古、大神の鎮座地を定め給うと投げた石は、この地にとどまり、厚く祀られています。



御 手 洗 (みたらし) 池

古くは、この池にて身心を清め参詣しましたが、又、雨乞神事も斎行していました。

みそぎ岩

境内西方、しなね川に祀られていましたが、現在は境内東方の神苑で祀られています。



斎 籠 (いごもり) 岩

境内北西方300m山中にある大岩。
3月11日から12日のいごもり祭が斎行されていた岩です。
(現在は社殿にて斎行)

土佐神社

しなね様

御祭神

味鋌高彦根神(あじすきたかひこねのかみ)

一言主神(ひとことぬしのかみ)

『日本書紀』の天武天皇四(六七五)年三月二日の条に「土左大神、神刀一口を以て、天皇に進る」とあり、また朱鳥元(八六)年の八月十三日条に「秦忌寸石勝を遣わして、幣を土左大神に奉る」とあり、祭神は土左大神です。この祭神は、都佐の国造が奉斎したものと伝えられています。『土佐国風土記』逸文には「土左の高賀茂の大社あり、其の神のみ名を一言主尊と為す。其のみ祖は詳かならず。一説に曰へらく、大穴六道尊のみ子、味鋌高彦根尊なりといへり。」とあり、祭神の変化がみられ、祭神を一言主尊と味鋌高彦根尊としています。この二柱の祭神は、古来より賀茂氏により大和葛城の里にて厚く仰ぎ祀られる神であり、大和の賀茂氏または、その同族が土佐の国造に任ぜられたことなどより、当地に祀られたものと伝えられています。

御神徳

味鋌高彦根神は、大国主神の御子であらせられ、国土の開拓、農工商あらゆる産業の繁栄の神様であることが伝えられ、一言主神は、和合協調の神として一言で物事が解決されるという特殊な信仰のある神様です。これにより当社は、古く

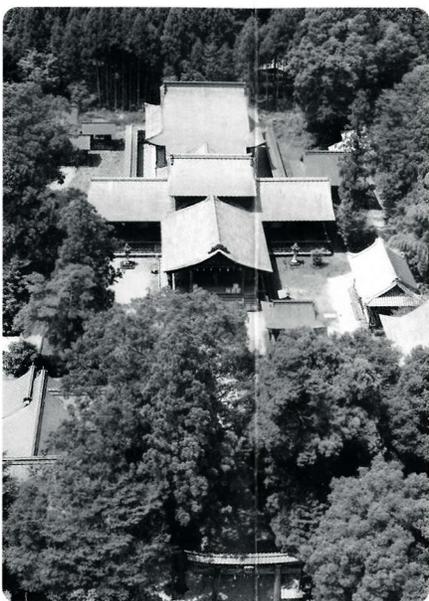
より南海の総鎮守として家内安全、農産繁栄、建設、政治などの神様とされ、さらに御功績により航海安全、交通安全、病氣平癒の神様と称えられるなど、開運招福の御神徳があると、崇敬されています。

御由緒

土佐神社の創祀については、明らかではありませんが、境内東北方の礫石と呼ばれる自然石を磐座として祭祀したものと考えられ、古代に遡ると言われています。延喜の制が布告された平安時代、醍醐天皇の御代には式内大社に列せられ都佐坐神社と称され、特に皇室の崇敬あつく勅使の参向もしばしばあり、朱雀天皇の御代天慶三(九四〇)年には、神階を正二位に進ませられています。鎌倉時代初頭には神仏習合時代に入り、土佐国総鎮守一宮とされ、当社・神宮寺・善楽寺にて一宮を形成、土佐高賀茂大明神と称えられました。室町時代には、武門の崇敬あつく、正親町天皇の御代元亀元(五七〇)年、長宗我部元親が、本殿、幣殿、拜殿を再興、安土桃山時代後陽成天皇の御代慶長六(一六〇)年には、山内一豊封をこの地に享けると共に以前の社領を免許し、二代忠義に至って摂社、末社を始め、鳥居、楼門、鼓樓を増築して、土佐の国最上の祈願所としました。明治元年、神仏分離令により、永年続いた神仏習合時代が終わり、明治四年には土佐神社と改称、社格を国幣中社に列しました。戦後、昭和二十二年(一九四六)年官国幣社の制度が廃止され、現在では、神社本庁の別表神社とされています。

社殿

元龜元(一五七〇)年長宗我部元親公の再建御建立の現社殿(国重文)は入母屋造りの前面に向拝を付けた本殿と、その前方の十字形をなす幣殿、拜殿、左右の翼、拜の出からなります。十字形の屋根は交差した部分が重層切妻であり、他は単層切妻です。幣殿を頭とし、尾に相当する拜の出を長くした十字形で、本殿に向かってとんぼが飛び込む形にみたてた入蜻蛉形式で、凱旋を報告する社という意味があると言われています。



社殿/航空写真

摂社

大国主神社

西御前社

事代主神社

本殿西に奉斎、

御祭神は福德田満の神として信仰があります。

末社

厳島神社

鼓楼の東、放生池中央の島に奉斎し御祭神は、市寸嶋姫命・多紀理毘売命・多岐都比売命、諸病平癒、縁結の神として信仰されています。

御旅所

古くは御船遊びの儀として須崎市浦ノ内の鳴無神社まで御神幸しましたが明治十三(一八八〇)年現在の御旅所へ神幸する様になりました。



本殿/西側面(国重文)

しなね祭

(八月二十四日・二十五日)

八月二十四日・二十五日の両日を通して斎行されるしなね祭は当社の最も重要な祭典であり、土佐三大祭の一つです。神恩を感謝し、御国の隆昌と世の中の平穩を祈念するもので、多くの参詣者で賑わっています。

八月二十四日

午前六時/忌火祭 午後八時/宵宮祭
二十五日

午前十時/しなね祭 午後三時/神幸祭

神楽や太鼓の奉納等の神賑行事も行われ、二十四日の夕刻には、夜店が軒を並べ夜遅くまで賑わいがあります。

しなね様の語源について

旧暦七月三日の祭です。しなねの語源は七月は台風吹き荒ぶことから風の神志那都比古から発したという説、また新稲がつづまったという説もあります。さらに当社祭神と関係する鍛冶と風の関連からとみる見方もあります。

特別授与品 お松明(おたいまつ)

二十四日午前六時忌火祭によって戴いた忌火は、かがり火に移され、二十五日夕刻まで絶やさず、ともされます。この忌火に松明をかざして持ち帰り、魔除けとする特殊信仰があります。これは、御神幸のみこしの行列に、オオカミが襲いかかりましたが、松明をふりかざし、追い払ったという故事によるものです。



特別授与品/お松明

神幸祭(神輿渡御)

午後三時から御神幸が始まります。神の船遊びと呼ばれ、古代には浦ノ内湾の鳴無神社(須崎市浦ノ内東分)へ海路渡御しました。神幸はしばしば海難に遭ったためとり止められ、江戸期には五台山北岸に小一宮という御旅所を設け、神幸しました。今日ではこれも止まり、当社南方の一本松御旅所まで徒歩で神幸しています。神輿をくぐるにより無病息災、家内安全の御利益が得られるという信仰があります。



御神幸